

第28回「東書教育賞」の審査を終えて



審査委員長

寺崎昌男先生

本日の贈呈式に至るまでには実にたくさんの方々のご努力をいただいております。第1次審査をしていただいた東京教育研究所の先生方、それから審査委員会で時間をかけ、議論していただいた審査委員会の先生方のご努力、それにこうした論文応募の機会を与えてくださっている東京書籍という会社に感謝したいと思います。その中でも最も重要なのは投稿された先生方のご努力であり、これは感謝するというより、むしろ敬意をもって私どもは応募されました論文を拝見いたしました。

中央教育研究所には四つの事業の柱があり、そのうち、この東書教育賞の審査は非常に大事な事業です。ところが、この事業をやっていく際に、私どもがいつも気にするのは、応募件数です。この応募件数がだんだん少なくなったら困るということです。大学でも受験者数が少なくなると大変困りますが、この教育賞の応募もそうです。

しかし、関係者の皆様のおかげで応募総数は少しずつではありますが、着実に増えており、もう下がる気配はございません。そういう点では、私どももおおいに自信を持って審査にあたらせていただいたということでございます。以下、審査の結果を申し上げます。

まず、小学校の部、最優秀賞を受賞されましたのは広島県東広島市立河内小学校の福島千恵子先生の論文です。「子どもの主体的な問題解

決を生む理科授業の創造」というものです。この論文は、第4学年の理科「物の温度と体積」、5学年の理科「振り子」の二つの単元と、それに総合的な学習、学校行事等の取り組みを合わせてまとめたものです。導入や発問が非常によく工夫されており、確かな研究・実践が行われていることがよくわかります。

また、地域の組織や大学との連携が図られているという点でも内容は大変充実しておりました。この河内小学校は第26回の東書教育賞で、「和文化教育で一人一人に確かな力をつける学校文化の創造」というテーマで木原加代子先生が優秀賞を受賞されています。そうした伝統の中で育まれた実践の報告であろうと、福島先生の論文を拝見いたしました。

小学校の部の優秀賞を受賞されましたのは、奈良県御所市立葛小学校の中尾真也先生の論文です。テーマは「子どもの『わかった!』を引き出す算数科の授業、初めの第一歩」というものです。教員2年目である先生が、子どもたちから「今の授業の意味がわからなかったよ」とつぶやかれたことをきっかけとして、子どもがわかる授業というものはどういうものかを考えられた実践です。

小数の割り算の授業で、丁寧な教科書解釈に基づいた教科書どおりの授業こそが子どもがわかる授業の第一歩だという、考えようによっては非常に平凡な、しかし、見方によっては逆に

非凡な着眼点に立った論文です。初めて子どもたちから「先生、よくわかった」と言われたときの先生の喜びに、教育者としての本質を見ることができ思いがいたしました。

もう一人優秀賞を受賞されましたのは**愛知県名古屋市立東白壁小学校の吉村恵美先生**の論文です。テーマは「違っていて 当然だよ 先生」というものです。それは学級の中にいる、韓国人とフィリピン人の二人の子どもの気持ちを大事にしながら、異文化を理解し、同時に体験させるという優れた実践論文となっています。論文の中には学級の子どもたちの側に、意識の変化と人間的成長が感じられるということがつづられており、ご承知のように、情報化社会、異文化社会とも言われる現在ですが、吉村先生の人権意識、教育観、世界観、それらを背景にした指導力の高さがうかがえる論文です。

もちろん、すべての小学校のクラスに同じように複数の異国の友達がいるという状況は考えられません。しかし、外国人の児童・生徒が増える傾向にあることは、今後の日本において不可避の時代です。そうした中で、子どもたちの中の異文化交流とは何かについて、優れた着眼と実践の成果が論文としてまとめられていると思いました。

さて、中学校部門に移ります。最優秀賞を受賞されましたのは、**千葉県南房総市立丸山中学校の鈴木康代先生**の論文です。テーマは「問題意識と探究心を高める理科地域教材の開発と学習活動の工夫」というものです。これは中学校の理科第1学年「大地の成り立ちと変化」という単元の中で、地域の自然を教材として、博物館と連携しながら行われた授業実践の記録です。

地域には火山は存在しないのに、火成岩があるのはどうしてだろうという疑問。この疑問がおのずから生徒たちの間に生まれるように設定されています。地域の教材と人材を活用して授業を展開されていて、生徒自身の問題意識や探究心を非常に高めることができた優れた論文です。

鈴木先生の学校の小松香江先生は昨年、英語教育「自己表現活動に意欲的にとりくむ生徒の育成」で優秀賞を受賞されています。

中学校の部の優秀賞を受賞されましたのは、**高知県本山町立嶺北中学校の大谷俊彦先生**の論文です。テーマは「『学び』のある書写授業の創造 ～清書完結型授業からの脱却～」というものです。現在、書写教育に対する関心は薄らいでおり、めったにない書写に関する実践論文です。

小学校教育においても、書写の授業が十分になされていないのではないかと、字の書き方の原理・原則の理解、ほかの文字への応用にまで理解が及んでいないのではないかとという問題を克服しようとした実践例です。書写教育の現状を的確にとらえて、解決の方向を示唆している優れた論文であると思いました。

次の優秀賞は、**愛知県清須市立西枇杷島中学校の桑原啓先生**の論文です。テーマは「思考力を育む社会科学習の創造」と題されています。学習指導要領では、ご承知のように、社会科で言語活動を基盤として、思考力、判断力、表現力等を確実に育むことが重視されています。

この論文は、生徒たちが育った町が「水と歴史に織りなされた町である」というキャッチフレーズで表されているけれども、それはいったいどうしてだろうかという切り口から、調べたことを丁寧にまとめる作業が行われており、社会参画を意識した授業構想が濃厚に表現されていました。生徒たちはその授業を通して、知識の理解から思考力の大切さ、難しさを感じることができました。これは、多くの学校で取り入れられる内容であり、また、教材の一般化、実践の一般化ができる内容であることが高く評価されました。

次の優秀賞は、**愛知県岡崎市立北中学校の武井翔先生**の論文です。テーマは「生き生きと英語を学び、表現できる生徒の育成」という論文です。本論文は中学校2年生における言語活動の充実を目指した英語教育の優れた実践です。

この実践は、岡崎市の観光名所を文章とスピーキングで表現するという活動を目指したもので、しっかりとした仮説を立て、抽出した生徒を通して、その仮説を検証しています。全体の論文構成もよくできています。これは教科書の単元、表現活動を通して学ぶ語彙や文章構造を正確にとらえて、技能を活用し習得を図るという子どもたちの構造的な発達を図ろうとするお考えが強く感じられる大変優れた論文でした。

最後に、特別賞として、**杏林大学総合政策学部の水野美鈴先生**の論文が選ばれました。テーマは「生徒に発見の喜びを持たせるカード掲示の授業」というものです。これは指導領域を特定して、大変意欲的、創造的に取り組まれた研究実践論文です。非常に説得力があり、読み手に感銘を与える内容です。実践内容は具体的で、現場の先生方の参考になるものです。ぜひ、実践の総合性に注目して論文を読んでいただきたいと思います。

水野先生はこれまでに2回、最優秀賞を受賞されておられます。今回は特別賞という形で表彰させていただきました。

以上が選評でございますが、短い時間に申しましたので、具体的に伝わらなかった内容があると思いますが、お許しください。あとで、論文集が作成されますので、ぜひお読みいただきたいと思います。

最後に、私の感じたことを三つ申し上げたいと思います。一つは大震災に関することでございます。東北地区からの教育賞へのご応募は第25回が27編、第26回が26編、ところが第27回は15編と激減いたしました。これは無理からぬことだと思います。大震災の影響で実践記録をまとめる余裕など東北地区の先生方にはなかったと思われる。しかし、今回第28回のお応募は31編と増えており、第25回や第26回を大幅に上回りました。未曾有の混乱から立ち上がって、防災教育を含めた様々な生き生きとした実践をお寄せいただきました。

私が理事長をしております中央教育研究所で

は、大震災復興の支援活動をいたしております。いろいろな地域から子どもたちの表情が大変明るくなったということをうかがっております。子どもたちのためにも、1日も早い被災地の復興を祈りたいと思います。

二つ目は、毎回申し上げておりますが、教師が実践を書くということは日本の文化ではないかということです。私は何度も申しますが、これは日本独特の誇るべき教育文化の一つではないかと思っております。1930年代から、いや、もっとさかのばれば、明治時代から、つまり1900年代のはじめあたりからたくさんの教育雑誌が出版されましたが、そのどれにも先生方がごく普通に授業の記録を投稿されています。今でいう授業案や指導案と言われるもので、授業記録を読めるようにしたものが日本の教育雑誌にはたくさん掲載されてきました。こうした教育文化は今後も継承されていくべきものだと思います。

先生方がお寄せになった実践記録というのは、そうした教育文化の流れの中に位置付くものだと私は思っております。全世界で小学校、中学校の授業は行われていますし、どの国でも教師が授業実践を行っていると思います。しかし、それを教師自らが記録するという文化を持っている国は少ないのではないかと思います。日本はそれがはっきりと受け継がれてきている。ぜひこの流れを今後も受け継いでいていただきたいと願っております。

最後は、小学校英語のことでございます。新設された小学校英語教育の実践記録が出てくるかと思っておりましたが、応募がありませんでした。小学校英語教育に関しましては、教育実践の全体の中でもまだ決して多くありません。これは無理からぬことだと思います。

我々から見ても、いったい小学校英語というのは何を目的としているのか、どういう指導方法で、それは中学校英語とどこが違う、どこが共通し、何が基礎になり、何が前提となっているのか、あるいはまったく違うものなのかとい

うことがよくわからないのです。その辺がはっきりしていないというのが、論文の応募になかなかつながらない要因ではないかと思っております。しかし、これから先、指導実践が積み重ねられれば、様々な試みの実践記録のご応募があるものと思います。そのときを楽しみにしたいと思っております。

先生方、本日は本当におめでとうございました

た。結婚式をなさったことのある先生方は、今日は、あの披露宴のときに続くぐらい、皆さんから「おめでとう」「おめでとう」とお祝いを言われることと思います。

本日は本当におめでとうございました。これで、私の話を終わらせていただきます。ありがとうございました。



ご紹介いただきました白鷗大学の赤堀と申します。受賞された先生方、おめでとうございます。今日、私がこの壇上でお話しするのは実は初めてでございますが、ICTに関わる論文の総評を私のほうから簡単にご説明させていただきます。

今回、ICTに関わる論文のご応募は、23件と非常に少ない件数です。ただ、私はこれが悲しむべきことなのか、どうなのかと思いますと、むしろそれくらいいいのではないかという気がしています。ICTというのは道具です。いろいろな教科の中で、黒板やチョークのように、まるで掛け軸のように、またはワークブックのごく普通に使い始められています。特にICTだからということがないほうが道具の使い方としてはいいのではないかという気がしております。

ただ、残念ながら、ICTに関わる論文の受賞は奨励賞に入賞されており、今日の贈呈式にはご出席になれませんでした。

ICTの総評としましては、ここで奨励賞受賞論文の内容を少しご報告させていただきます。

1点は、小学校部門の山口県宇部市立藤山小学校の植木数弥先生の論文です。「面白さ楽しさを実感できる『歴史の授業』を創る」というテーマで、歴史授業を振り返るものです。私はこの歴史の面白さを体験させる実践記録を読んで非常に感動しました。こんなにすごい研究があるんだというのが正直な感想です。これはICTというより、どちらかという教材のすごさを感じました。小学校ではこんなに工夫されるのかと非常にびっくりしました。

なぜかと申しますと話が少しそれますが、私は今、白鷗大学という大学の教育学部におりま

す。教育学部は、私どものところは小学校教員養成学部なのですが、恥ずかしながら、私は小学校の教員の経験がないのでよくわからないのです。ですので、学生を小学校の教員として送り出すために、いろいろな実践をやらせております。近隣の小学校と連携して、「スクールサポート」といって授業の合間に学校へ行き、そして、先生のお手伝いをさせる。そして、そこで学生に実践を勉強させてもらうということを私どもでは行っております。実はこれが大変好評で、実践によって学生はいろいろなアイデアを持ってきます。例えば、私のゼミでは、学生が卒論を書く際に、今、4年生ですと11~12名いるのですが、小学校の現場に行くと、「叱るって難しいな」と感じたと言うんです。「どうやって正しく叱ったらいいかわからない」というわけです。私は、「あっ、それは面白い、それを研究しなさい」というように学生には実践と研究をさせております。

研究テーマというものは、ほとんどが実践から得られるんですね。教育実習やスクールサポートへ行ってみたら、「いかに自分の板書が下手かがよくわかった。どうやって板書したらいいんだ」と問題意識を持ったとき、「あっ、それを研究しなさい」というように研究テーマが生まれる。実践というものには文献にはない宝がたくさんあると思います。その宝を自分の研究テーマにすることは、素晴らしいことではないかと思えます。

本日ここにおいでの先生方もそのようなことをご研究されているのだらうと思えます。日々の実践の中で「これは？」と気づいたこと、その「気づく」ということは大変素晴らしいことなのです。先ほど、寺崎先生がおっしゃいましたが、実践を記録するということ、気づいたことを記録するということ、そして、それを伝えていくということ。それは私どもの役割であり、責任だと思えます。

話は余談になりましたけれども、植木先生の実践の素晴らしさというのは、まさにこの気づ

くということに着眼点を置いているということです。「社会科は面白いか」「歴史は面白いか」といっても、「ちっとも面白くない」、「覚えることが多くて、難しい語句がいっぱいある」という子どもたちの声の裏側にある知的好奇心の喚起ということに気づかれたものだと思います。

私自身も小学生や中学生だったころは社会科が苦手で、何が苦手だったかということ、覚えるということですね。ですから、どうしたら面白くすることができるかを考えたものです。まさに、これが原点だらうと思えました。

また、植木先生がICTをどこに使ったかと申しますと、「イメージ化」です。先生は、例えば、平安時代の美人を紹介するよと言って、源氏物語絵巻から平安美人をプロジェクターで映しました。それで、現代の美人と対比させると明らかに違いがよくわかる。平安時代の美人というのは顔が大きくて、鼻が低くて、目が細くて、色が白く、髪が長いわけですが、そこから子どもたちにいろいろ議論させることで、様々な課題が生まれているわけです。平安時代は寝殿造りで昼間でも暗いから、そのときに、目立つように、色が白くて顔が大きくてというのが美人の条件になったのではないかと考察されています。こうした取り組み方であれば、たぶん子どもたちは想像力をはたらかせて議論するだらうと思えます。

私はやはりイメージ化が大切だと思います。教科書に載っているような小さな写真などでは平安時代の美人はよくわかりません。プロジェクターで大きく映す、そして、現代ではAKB48の誰でもいいですけども、現代の美人といわれる人を映して比べればよくわかりますね。「わかる」ということが素晴らしいことなわけです。

平安時代の美人の顔はイメージがわからない。だったら映像で見せればいいじゃないか、ということです。それから、これも面白いと思ったのですが、俳句でも「荒海や佐渡によこたふ天の河」という句で、なぜ松尾芭蕉がすごいかと

写真を見せたわけです。「荒海や」ですから日本海の荒海を見せて、そして、「天の川」だから、天の川と上と下で重ねてみたら、こんな光景なのかと初めてイメージできるということです。

ICTを使うというのは、そんな高尚なことではなくて、人間の脳のどこかに、考える部分とイメージ処理する部分と、両方で五感を働かせたら理解しやすくなるというところに、ICTをうまく使っておられると感心しました。そんなに難しいことではないと思います。

2点目は中学校部門の奨励賞ですが、**滋賀県守山市立守山北中学校の中西一雄先生の論文**です。これは「互いに学び、高め合う理科授業の実践 ～ICT活用を通して～」というテーマです。この授業で使われている道具はタブレットPCです。ご存じの方も多いと思いますが、タブレットPCというのは、簡単にいうとペンで書けるということなのです。今、普通のPCはキーボードとマウスですが、タブレットというのは「盤」ですから、そこに自分でチェックができます。これが本質的ですね。

なぜ本質的か。これは「アノテーション」といいます。つまり、自分の書いたところにちょっと線を引きたいとか、ちょっとメモをしたいとか、コメントを付けることを指しますが、これは非常に重要なことなのです。私が以前にメディア研究を行ったときに、面白い研究がありました。

アノテーションの研究というものがありまして、カリフォルニアのパロアルト研究所で出した論文ですが、冒頭のイントロダクションに非常に面白いことが書いてあります。そこには、「人は楽しみのために読む小説にアンダーラインは引かない」と書いてあるんです。面白いですね。そのとおりです。小説というものは、私も電車の中で楽しいから夢中になって読んでしまうのですが、面白いからといって下線は引きませんよ、メモは書きませんよ、学習ではないからです。エンターテインメントだからです。それでいいんですね。しかし、学習は違います。

読んで、疑問がわくとか、大切と思うところにはメモをしたくなるはずですよ。私たちも学会などですごいなと思ったら線を引きますし、面白い研究だとメモしたりして、いろいろなことをやっていますが、それなんですよ。

私はインターフェースの研究をやっている面白と思うことは、人間の脳とそのメディアとの間に距離があればあるほど忘れがちになるということです。今までのキーボードにはやはり距離があるんです。しかし、本当に重要だと思ったら、すぐにそこを指をささなければいけないのです。指をさすから記憶に残すことができているので、今、電子情報ボードといわれるものが注目されているわけです。

電子黒板というのは、黒板です。黒板ですが、指し示することができる黒板なんです。指し示すことで、それが変化します。つまり、インタラクティブな黒板が「電子黒板」と呼ばれているものなのです。それは、自己対話です。私たちは教材を使って自分と対話してきているわけで、教材と私たちを結ぶインターフェースがペンということなのです。だから、紙というのはすごい道具です。

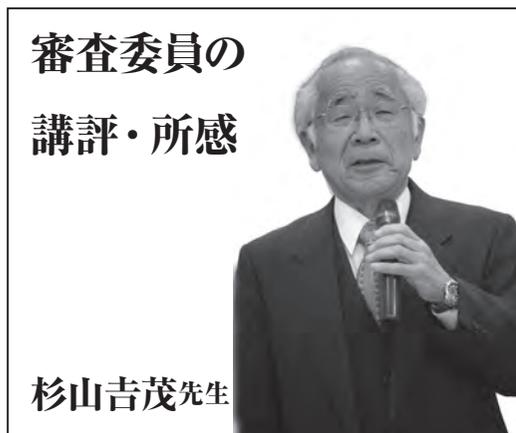
私どもは、紙とタブレットとPCの比較研究をずっとやってきていますが、紙にはなかなか勝てないですね。ですから、決して子どもからペンや鉛筆を取り上げてはいけないと、これまで私は教育に関わってきて強く実感しています。

ICTの活用とは、例えば、映像が出たりする新しいメディアと、紙というメディアと、黒板というメディアとをどのようにうまく組み合わせると有効に使っていくかということです。それを見事に中西先生は実践されています。

奨励賞を受賞されました、この二人の先生方は、特にICTを意識しているわけではないのです。まるで透明なガラスのような形に入り込んで普通の教科の学習とまったく同じように、どうやったら効果的な学習ができるかということで工夫されました。そこに、私たちは価値を認めたわけです。

実践を記録するという事は、自分の失敗も含めて、リフレクションすることによって、自分自身をよりよく改善できるのです。こんな失敗をしたくないから今度はもっとこういうふうにしてみようなどと記録を残すことで、全部鮮明に頭に入ってくるんですね。そうしたことを継続していくことが、私ども教育に携わる者の義務ではないかと思っています。ここにいらっしゃる皆さんはその頂点に立っておられる先生方だと思います。ぜひこれからも続けていただければ幸いです。

最後に、中央教育研究所の水沼所長をはじめ、審査にあられた先生方にお礼を申し上げて、ご挨拶に代えさせていただきます。



受賞の先生方、おめでとうございます。どの論文も立派な論文でということなのですが、ただ一つだけ論文を拝見して感じたことがありますので、そのことについてお話ししたいと思います。

私自身はこの教育賞の論文については、これを読んで「真似ができる」、その真似をすることによって、「よりよい教育ができる」ということを大切に思っています。要するに、再現性というか、一般性ということをお大事にしたいと思って論文を審査してきましたが、今回、少し違った論文がありました。それは小学校の優秀

賞を受賞された愛知県の吉村先生の「違っていても 当然だよね 先生」という論文です。

この論文は、韓国人の母親を持つ児童とフィリピン人の児童がいる学級の中での実践ですが、考えてみれば、外国人が教室の中にいるというのはある意味では特殊で、この実践を真似しろといってもできないことです。そういう意味でいえば、これは特殊だから除いておこうと思うのですが、この論文を読みだしたら、最後まで一気に読まされました。

多くの論文は、文科省がこういっています、社会情勢はこうなっています、子どもはこんな子どもにしたいです、ああしたいですという理論があった上で実践があるという形ですが、この論文は、子どもの実践の姿から入っています。論文の書き方も違うし、特殊だからだめかと思うと、思わず引き込まれて読まされました。そして何がわかったかと思ったら、ハウツーがわかったのではなく、心がけです。外国の子どもや外国の人に対する心構え、精神というか、そういうものが伝わってくる論文だったのです。

だから、ハウツーとしてこうやったらいいという方法ではなく、こういう心構えで子どもに接したら、子どもからこんな反応が返ってきた、これにまた対応すると、こんな言葉が返ってきた、それをまた、子どもに返したら、また子どもからいい考えが出てきたというように、要するにハウツーではないけれど、外国の子どもや外国人に対して、こういう姿勢でいるといいんだねということが、論文を読んでいて伝わってくるものがあつたという意味で、私は今までとは違う論文だという意味でいいなと思いました。

たいていの論文は、私はこういう子どもを育てたいというのが書いてあって、それぞれの実践があるわけですが、この論文は、論文の書き方として一つの特徴なお手本みたいなものが示されているという意味で、とても印象的でした。

ここにいらっしゃる先生方の論文が悪いというわけではないです。とてもいいのですが、この論文は、心構えが伝わってくる、感動が伝わっ

てくる、気持ちが伝わってくる、うれしさが伝わってくる、そういう書き方もやってみていただくことができたらと思いました。

ある意味では、先程の赤堀先生の小説のお話にありましたように、小説的に読んで、小説を読んだから何もならないことはなくて、小説を読んだおかげで自分の気持ちが洗われたり、生きる力になるところがあるわけですから、そうしたところを真似するようところが少しずつ出てほしいと思います。

これからも、ぜひ頑張ってくださいと思います。本日はおめでとうございました。

審査委員の講評・所感



武内 清先生

受賞された先生方、おめでとうございました。私はこれまで、教育調査のようなことばかりやってきまして教育実践に疎いものですが、このたびたくさんの論文を読ませていただき、大変勉強になりました。

今回選ばれた論文を見ますと、次のような五つの共通点があると感じました。第1に、時代に合った内容やテーマ、また、時代の要請に合ったものが選ばれていると感じました。第2に、先生方の日ごろの地道な教育実践が透けて見えるような研究が選ばれていると感じました。第3に、子どもたちの興味・関心に基づくもの、ないしはそういうものを引き出すような研究が選ばれていると感じました。第4に、ただ、子

どもたちの興味だけではなく、普遍的な知識や現代の問題に結びつくような要素を含んだ研究が選ばれたと感じました。それから、第5に、先生方のなされた実践がデータや事例に基づいてきちんと検証されている論文だということです。今回選ばれた論文は皆この五つの要素を兼ね備えた優れたものであると感じています。

教育調査などを行っている立場から一つだけ申し上げますと、教育研究には、熱い思いと同時に、科学性、実証性が大事だということも強調しておきたいと思います。自分の教育実践が有効であることを検証するとき、その実践に合うようなケースや結果だけを引き出して、あたかもこれがすべてに当てはまるような書き方をしがちです。また、子ども全体のアンケートや満足度、学力というものを出して検証しているものもありますが、ほかとの比較があまりなく、本当にそれが満足度が高いのか、学力が高いのか、また、その学力が高いのはその実践の影響なのか、もっとほかに要因があったのではないかと思わせるようなものもありました。教育研究という分野は科学性を高めることが難しいのですが、科学性、実証性ということも大事だということをつけ加えておきたいと思います。

今回の先生方の実践はとても優れたものであり、これらが全国の模範となって、日本の教育水準が上がるものと考えております。

本日は本当におめでとうございました。

審査委員の講評・所感



壺内 明先生

東書教育賞を受賞された先生方、おめでとうございます。教育に関するすべての関連法規が整備され、小学校に引き続いて、昨年度より中学校の新学習指導要領が全面実施されました。

今年度受賞された先生方は、この趣旨を十分に踏まえて、各学校で授業改善に努め実践研究論文としてまとめられました。先生方の実践研究に共通することは、一つには、指導方法を工夫して「基礎的・基本的な知識や技能を確実に習得」させていること、二つ目には、問題解決をするために必要な「思考力・判断力・表現力」等の育成を体験活動や言語活動などを重視して取り組んでいることです。私からは、中学校の部について感想を述べさせていただきます。

最優秀賞を受賞された千葉県南房総市立丸山中学校の鈴木康代先生、おめでとうございます。先生は、「問題意識と探究心を高める理科地域教材の開発と学習活動の工夫」というテーマで博物館と連携しながら「地域教材の開発」に取り組まれました。生徒の問題意識と探究心を高めるために地域に身近にある岩石や地層などについて、実際に現地で野外観察を実施して多くの成果を上げました。生徒は、今まで知らなかった地域の大地の成り立ちについて新たな発見をするともに、地域をさらに深く理解するようになりました。先生の教育実践は、「理数教育の充実」が叫ばれている今日、理科教育の発展に一石を投じた素晴らしい研究成果であります。

次に、優秀賞を受賞された高知県本山町立嶺北中学校の大谷俊彦先生は、前回の奨励賞に続いての受賞です。おめでとうございます。テーマを「学びのある書写授業の創造」と設定し、書写教育の現状を踏まえて、従来の「清書完結型授業」から脱却し、思考力・判断力・表現力、さらには問題解決力や応用力の育成を重視した授業の転換を図り、多くの成果を上げられました。文字の書き方の原理・原則を理解させ、ほかの文字への応用にまで発展させた「学び」のある書写授業へ定着させた取り組みは、今後の書写教育の進むべき方向性を示唆していただきました。

同じく優秀賞を受賞された愛知県清須市立西枇杷島中学校の桑原啓先生、おめでとうございます。先生は、「思考力を育む社会科学習の創造」というテーマで、考える力の育成を重視して実践研究を進められました。社会参画の視点を取り入れた地域学習を実践し、「調べて分かった事実」「根拠」「結論」を視覚的にとらえさせて思考力の育成を図り、生徒が自分なりの考えを持つことができるようになったことは、論理的思考力はもちろんのこと判断力や表現力の育成にもつながる大きな成果であります。

同じく愛知県岡崎市立北中学校の武井翔先生、前々回に引き続いての優秀賞の受賞おめでとうございます。今回は、言語活動を重視して「生き生きと英語を学び、表現できる生徒の育成」というテーマで取り組まれました。「岡崎市の観光名所」に関する自主教材を開発し、英語で自分の考えを表現する授業を実践するとともに、「指導と評価の一体化」まで研究を深めたことは大きな成果であります。「言語活動の充実」は、すべての教科等で実施しなければなりません。このことを考えますと先生の実践研究は、英語科における先駆的な研究といえます。今後さらに継続研究されることを期待しています。

特別賞を受賞された杏林大学総合政策学部の水野美鈴先生、おめでとうございます。先生は、過去2回もの最優秀賞を受賞され、研究実績の

ある先生です。今回は、国語科を通して「生徒に発見の喜びを持たせるカード掲示の授業」というテーマで取り組み成果を上げられました。長年の教職経験から生徒に発見の喜びを実感させる授業や興味・関心を持続させる授業は、カード掲示方式が効果的であるという学習指導法の確立を図りました。ますますのご活躍を期待しています。

結びに、受賞された先生方の今後のご健勝とご発展を祈念して感想とさせていただきます。本日は、誠にありがとうございました。

審査委員の講評・所感



鳥飼玖美子先生

受賞なされました先生方、本当におめでとうございます。私も自分の専門ではない各教科の論文を読ませていただき、非常に学ぶところが大きかったと感謝しております。その中で、特に私の専門である英語の観点からお話をしたいと思います。

中学校優秀賞受賞の武井先生の論文については、すでに講評が出ていますので、簡単に申し上げますと、中学生にとって身近でありながら、しかし、中身のある、そして目的を持って、意味のある活動に結びつけながら英語を発信せようと様々な工夫を凝らしてらっしゃるご努力にまず感銘を受けました。

なぜかと申しますと、英語の場合は特に単語であるとか文法構造であるとか、ある程度教え

込んで理解させて、しかも暗記もさせなければいけない。単語やフレーズであるとか、そういうものを暗記しないことには、いくら話しなさいと言っても出てこないわけです。ある意味でインプットをしなければいけないのですが、そこが、特に中学生には受け入れられないという実情を、実は私は昨年末、目の当たりにいたしました。

中央教育研究所が東日本大震災の復興支援の一環として東北に講師派遣を行っています。私も昨年秋、会津若松市に参りまして、二つの中学校を訪問させていただきました。

実は私は考えてみましたら、中学生にじかに話しかけるという経験がほとんどなかったものですから、中学生が今何を考えているかを知りたいと思ひまして、事前に全校生徒に対して、2校とも英語についての質問やコメントをアンケート調査していただき、それを読んでから出かけて行きました。衝撃を受けました。

いちばん多くのコメント、疑問というのは、「僕たち、私たちは何のために英語をやるんですか、わけわかりません」、「なんでこんな難しい外国語をやらなければいけないんですか」、「日本にいたら、別に必要ないでしょう」、「行きたい人はしゃべれたほうがいいから勉強すればいいけれども、英語が嫌いだったら行かない方がいいんじゃないですか」、「はっきり言って英語は嫌いです」という、その言い方に、「本当にもう嫌だ、なんでこんなことやるの」という叫びのようなものが感じ取られました。

次に多かったのが、「単語が覚えられません」、「センテンスを覚えろと先生は言うけれど、覚えられません、どうしたら暗記できますか、どうしたら覚えられるんですか、覚えられません」という質問でした。

いかに子どもたちが、何のためにこんなことをやらなければいけないのかと思ひながら、暗記せざるを得ない立場にあって、まったく楽しむことなく、嫌々やっているかということを目の当たりにしました。これではいくら頑張って

いい教科書を作り、先生たちが現場で努力しても、英語を使って世界に出ていこうという人材は育たないと思いました。

私は会津若松の子どもたちには、「福島県というのは、今は『Fukushima』とアルファベットに書けば、世界中で通用するぐらい原発で有名になってしまっている。あなたたちが今にせよ、あるいは少し大きくなって、外国に行ったときに、「あなたはどこから来ました?」「日本からです」「日本のどこからですか?」「福島です」と言ったときに、「あのとき、どうでしたか?」「今、原発はどうなっていますか?」と必ずきかれます」と話しました。

そして、そのときに、やはりどの国の人も話せるという意味では、共通語としての英語がいちばんコミュニケーションには使える言語であるし、そのときに英語を使って、あの時はどうだったか、福島に暮らしている人間として正直に、率直に語ってほしいのです。しかし、せっかく中学校で習った英語を忘れてしまって、話したい、言いたいだけでも、「I don't know」なんかで済ませてほしくないわけです。中学校3年間の英語をしっかりやれば、しゃれたことは言えないかもしれないけれども、自分の気持ちを伝えることはできる、英語は世界につながる窓なんだということを私なりの言葉で伝えたつもりです。

そのあと、感想文を送ってくださった中学校がありました。それを読むと、「少し英語をやってみようかという気になりました」というコメントがいくつかあり、「ああ、よかった」という思いがわいてきました。やはり中学生といえども、何のためにやるのかということがわからなければ、勉強しようという気にもならないし、訳のわからない単語を覚えようという気にもなりません。覚えさせるのではなく、何のために今、こんな普段必要のないような言葉を学ばなければいけないのか。いや、学ばなくてもいいのだけれども、学んだほうが世界が広がるよ、楽しいよ、ということ教える側がメッセージ

として、お説教ではなく、きちんと伝わるような教え方をしていただきたいとお願いしたいのです。

「受験があるのだから覚えなさい」というのは、とても楽です。しかし、それでは子どもたちは動かない。そうではなくて、英語の魅力、英語がなぜ日本にとって今必要なのか。いや、日本にとってではなく、一人ひとりの生徒たちが英語を学ぶことで、どれだけ人生が豊かになるかという、その可能性をことあるごとに伝えていただきたいのです。そして、夢を持って英語を学ぼうという気に生徒たちが自分で思うようになれば、単語だの、センテンスだの、文法だの、そんなものは自分から進んで勉強するようになると私は思います。

ほかの教科の先生方も、この子どもたちが育っていったときに、英語という外国語が自分の一つの財産になるという思いで子どもたちに接していただければという願いを込めてお祝いとさせていただきます。

これからもぜひ頑張っていたいただきたいと思います。

審査委員の講評・所感

三上裕三先生



このたび東書教育賞を受賞されました先生方に心よりお祝い申し上げます。

私は小学校部門を中心に感想を述べさせていただきます。

今年度、小学校の応募総数は前年度より20点ほど増えています。教科・領域別では、算数が最も多く、以下国語、社会、総合、特別支援、理科の順となっております。特別支援が急に増えたのが特徴的なことであり、課題を多く抱えている現場の状況を伺い知ることができます。今年度、いじめの問題が大きな社会問題ともなり、その対応が求められています。生活指導の分野に関する応募が極めて少ない状況にあります。子どもの心の成長と社会性を育てる視点での実践研究が期待されます。

さて、小学校部門で最優秀賞を受賞されました広島県東広島市立河内小学校の福島千恵子先生、誠におめでとうございます。「子どもの主体的な問題解決を生む理科授業の創造」と題するテーマで、2年間にわたる理科の実践研究をまとめられました。子どもが指示されたとおりに問題解決の過程をなぞるだけの授業で終わるのでなく、問題解決に向けて子ども一人ひとりが問題意識を持ち、能動的に頭を働かせる授業をするために、様々な工夫が研究の視点として提示されています。先生の実践は、理科の授業だけにとどまることなく、総合的な学習や学校行事との関連を図りながら、真に生きて働く理科授業の実践を目指したものであります。

なお、河内小学校は、山間地にある少人数、小規模校ですが、地域に根付く文化の伝承や地域の人々との交流等を通して独自の学校文化を形成し、大事に継承している学校です。今後の研究実践の成果に期待しております。

次に優秀賞を受賞されました奈良県御所市立葛小学校の中尾真也先生は、教職に就いて2年目の若い先生です。「子どもの『わかった!』を引き出す算数科の授業、初めの第一歩」という論文らしくないテーマです。しかし、この長いテーマに先生の様々な思いや授業に対する熱意が込められています。先生は、小数のかけ算を指導した授業の後で、「今日の授業は意味がわからなかった」という子どものつぶやきがこれまでの指導を振り返らせる大きな転機となり

ました。そこで取り組んだのが徹底的に教科書を研究し、自分が納得した上で授業に臨もうとしたことです。教科書と指導書を数社取り寄せ、比較考察しながら教科書の解釈を深めていくうちに、教材研究の意義が徐々にわかってきました。先生の研究は、初任者がだれでも一度は当たる壁を乗り越えるために、まずは徹底して教科書を研究してみることの重要性を改めて知らせてくれた実践であると思います。

続いて優秀賞を受賞された愛知県名古屋市立東白壁小学校の吉村恵美先生は、「違って当然だよ 先生」というテーマで総合的な学習での実践をまとめられました。今や日本全国の学校どこでも、外国籍の子どもたちが日本の子どもと席を並べて学習する教室が見られるようになりました。吉村先生のクラスにも、韓国、フィリピンから来た子どもがいます。この二人の母国の生活習慣や文化を学ぶ体験的な授業を取り入れた実践を報告されたものです。実践を通して、子どもたちが肌の色、習慣の違い、聞きなれない名前など、それぞれの違いを違いとして自然に受け入れられるようになり、子どもの意識の変化が感じられる素晴らしい実践です。

「百の議論よりもまず実践」といわれるように、学校現場で日々行われている優れた教育実践に光を当てる東書教育賞に、来年度も多くの応募がありますことを期待して感想といたします。

